イギリス便り（七）

寺田貞次

バーソロミウ地圖製作所

ヂョンストン社に並で、Edinburghには　尙一製圖所が在ります、申す迄もなく Bartholomew　地圖製作所であります、ヂョンストン社とは全く反對に市の南端に近い Duncan Streetと云ふ處に在り、ヂョンストン社の赤煉瓦の古風な建物であるに反して此處は Edinburgh に普通觀る石造の堂々たる建物で Geographical Institute と稱して居ます。一日訪問すると、社長 Bartholomew 氏の令弟が案内して下した氏は先年世界漫遊の途、我國にも來られた事があるので、一層の親しみを以て懇切に説明して下した、社は二階建で階下は事務室、販賣室、階上が製作室、研究室になつて居る、先づ社長室にDr. Bartholomew 氏に會する、こぢんまりした綺麗な室で、爐石の上には故Dr. G. G B. Bartholomew 翁の寫眞が眼を引た。白髮學者風の老翁で、當社の創設者として、英國地圖學界に貢獻した許でなくScottish geographical Society にも關係を有し、地學上貢獻も少くない、現社長並に自分を案内して下した令弟は、其の令息に當るのである、此室の隣りは細長い室で、圖書室をなし、周壁には書棚を備え Scottish geographical magazine を初め、各國の地學雜誌並に案内記等地學に關する書物を藏し、室の中央には細長い卓子を置き、引出を備えて地圖を蒐集して居る、尙周壁には地圖學諸大家の肉像寫眞を掲げ、獨國 Petermann の石膏胸像も置かれてあつた、次の室は原圖製作室で窓側に机を並べ、數名のGeographens-Draftsman が製圖して居た、ヂョンストン社の場合と同樣、緻密な仕事には少なからず驚いた、次の室は彫刻室で、銅板上に地圖を彫刻して居る、之も却々に細密な仕事、　蟲眼鏡を使用して彫刻して居る　Engravers の一人は若し彫刻に間違が生じた場合にも容易に訂正することが出來ると、實地を示して説明してくれて居た、階上は是れだけで、階下に降る、階下は一帶印刷室で廣大な漆喰でかためた床の上に、多數の印刷機が運轉して居る、家の一側を劃して一室をつくり、其處にはヂョンストン社で觀たと同實のLithographic stoneを整理する Lithodraftsmen が机を並べて仕事に熱中して居り、其傍の一室には年少の女職工が石板圖上に繪具を塗て居た、此の印刷室の隣りは地圖の仕上室で數名の女職工が地圖に糊をおき麻布を張りつけて

居たヂョンストンの地圖と並で英國での良圖 Bartholomew の地圖は発づかくして出來上るので、案内して下した Bartholomew 氏は此の印刷室の一隅に在る事務室で。既刊の各種の地圖を示して、説明され、日本の圖に付ては氏の日本旅行の道筋を示して當時を追懷して居た、自分はヂョンストン社では創業者ヂョンストンの墓所をたづね、參詣もしたからヂョンストンと並ぶ Bartholomew 氏の遺跡をもたづねたいと、伺て見た處が氏の故郷がポルチュガルであるので墳墓は當地にはないと云ふ事であつた、氏の教示に依ると Lisbon 附近の San Pedre Cemetory Cintra が其の墓所である由だが餘り邊鄙で參詣の機を得ないのは遺憾であります。Edinburgh で地理に關係のある場所は此の他に Watt College を申すのが在ります、Edinburgh 大學畔で、博物館前に位せる、工業學校で其處に地理科が置かれてあります、教授は Small Commercial Geography を G. G. Chisholm 教授と共に書いた人で、一寸趣味を引たので、縱覽しましたが、專門の學校でない爲めに、特筆しなければならぬ樣な設備を發見しませなんだ、Edinburgh に於ける地學關係ケ所として申し上なければならぬものは、大略右の如きものと考へます

エヂンバラと其の四近

暫く Edinburgh に滯在して居りますと、最初來た時に考へたよりも、意外に趣味の深い處であると云ふ事を發見、然がも夫が全くの偶然でないと云ふ事を知て愉快に存じて居りますと申しますのは、元來 Edinburgh と云ふ處は英國では北偏の地ではありますけれども、昔時は Scotland の首府として發達した處で、Glasgow の樣に南港でも無く、又工業上に於ける地位もさまで著しくありませぬ、夫で商工業地の樣な喧騒はなく、氣候も北偏に似ず穏かで嚴冬と雖、倫敦邊と大差を見ず、積雪と云ふ樣な事も少く年中綠草を絶たず、風は幾らか強く、冷ではありますけれども倫敦方面で見るが樣な濃霧暗黑と云ふ憂はなく、からりと晴れた空、實に爽快で況や新綠から夏季にかけての氣持に於ておやで、落付いて研究するには好適の土地であります、且英國の南部 England 地方は一帶の平地又は平凡極まる丘陵地のみで、變化に乏しいのに反し、Edinburgh 地方は單なる平地緩斜面のみでは無く、北には大高地 Highland を控へ、地構地質の複雜なる地形上の變化を興へ、地下には石炭其他礦物の産にも富み、科學研究を誘ふ要素を備えて居ます、之は南部地方では得られぬ事柄で、自然研究心を養成し、又研究者を誘集する基となつたらしく、Edinburgh 地方に於て早く各方面の名家を出したのも全く偶然でないと考へられました。

George Buchanan(1506—1532),(歴史家)
Sir Walter Scott(1771—1832), Robert Burns (1759—1796), David Hume(1711—1776), Adam Smith (1723—1790), James Watt(1736—1819), Ferguson (1723—1816), Stewart (1753—1828), Thomas Carlyle (1795—1881), David Livingston(1813—1881), Robert Louis Stevenson

(1850—1894), Daniel Webster (1782—1852), Hugh Miller (1802—1856), など擧げて見ると来たくあるでありませう。

就中 David Hume, Ferguson, Stewart, Adam Smith の樣な哲學者、經濟學者、史學者で其の學說に於きまして地學史上忘れるべからざる出來ない諸大家が揃も揃つて當地附近の出でありEdinburgh 大學に關係ある點は非常な愉快な事で、滯在中は時々其の遺跡を訪ひ、追懷おく能はざるものがありました。Adam Smith の遺跡の知き、本邦から來られた方は誰でも必ず觀て行かれる處で、日本人と云へばAdam Smith 崇拜者さでも思ふものか、名家の肖像を集めた美術館に行つても之が肖像を案內せられ、古本屋を覗いても Smith の著を示めされると云ふ盛況であります。自分は西本願寺の護音得忍師が來られた際御伴して Smith の生地を訪ねました。丁度Edinburgh から Firth of Farth を隔てゝ其の對岸 Kirkcaldy と云ふ處で濱岸の一寒村には過ぎないけれども、Smith 以外に文學者の Thomas Carlyle や Irving の遺跡も在り、單に歷史的に於てのみならず、附近には石炭の產出もあり、特種の工業も行はれ、却々趣味の深い處でありました。Smith の生家は町の中心とも云ふ可き、街路 (High Street) に沿ふた處に在つたので、今は銀行(North of Scotland Bank)が新に建設され、其の外壁に鐵版を張り其の遺跡を表示して居ります。

House removed here, Stood the Birthplace of Adam Smith L. L. D-F. R. S. Author of the Wealth of Nations, Born 1723, Died 1790. Professor of moral philosophy in Glasgow University 1751—1764. Lord rector Glasgow University 1787. Commissioner of Customs Edinburgh 1778—1790, the "Wealth of Nations" was written while the Author was resident here 1767—1776, buried in Cannongate churchyard Edinburgh. Erected 1919.

其の一七九〇年 Edinburgh に沒するや High Street の Cannongate 寺に葬られたもので、寺は Edinburgh の古町の中に在つて、大學からは程遠くない、當地に來られる知人のある毎に必ず案內もしたので、此等を加へると少くも數度參拜しました。門を入て直ぐ左手が其の墓域で、方三間を圍して鐵柵を繞らし、碑銘明に刻せられて居る、此の寺域には名家の墓壁も少くなく、此の墓から教會堂に沿ふて北し、墓域の稍低くなつて居る處を下ると、左側に大きな石造の建物が在る、之れが哲學者 Stewart 家の墓である、常に閉鎖してあるから、內部をうかゝる事は出來ないけれども、建物の上部には

Dugald Stewart Hic situs Est.

Filius et Filia, Liberi superstites, Patri Carissimo Munus supremum, Moerentes, Hoc sepulcrum dedicaverunt.

と刻してあり、尙寺域の後方に位して居る Carton Hill と云ふ丘陵上には、巨大な記念碑が建てられ、建物の表面に

Dugald Stewart
Born November 22, 1753,
Died June 11, 1828.

と刻してある、高大なネルソンの記念塔と共に此の丘の異彩を放つて居る、David Humeの遺跡も此の近くでEdinburghの誇となつて居る有名なScottの記念塔の前の通りはHumeの居宅の在た處で、今尙David Streetと稱して之を記念として居る、滯在中下宿はDandas Streetで大學に通ふには此處を通らねばならぬので、吾人に一入の印象となつた、墓も意外に近いCarton Hillの麓一墓域中に在るので、是又時々の參拜を怠らなんだ、墓域の西南隅に在る高大な石造の圓筒形建物は其の墓壁で、北面して墓門を備え、上に

David Hume
Born April 26 th 1711 Died August
Erected in Memory of Him in 1778

と大書し、內部は平坦で一物を存して居らず、唯內部壁上に一碑板を置き

Sacred to the Memory of the
Hon. David Hume of ……
One of the Barons of Excheques, and of his sons
John David & Joseph, who lie buried Here.
Miss Elizabeth Hume Dead 16th Nov. 1848

と刻してあるのみであつた、然かしMuseum of National Antiquities內に在る肖像集中に見るあのDavid Humeが此處に横はつて居るかと思ふと感深きものがあつた。

地理教材としての地形圖（第二十二）

信濃國小野盆地

參照地圖。五萬分の一、鹽尻及び伊那の二葉、

中央線に乘つて鹽尻驛を去り東京飯田町に向つて來ると暫らくは山際を走つて北方に松本平の展開するを瞰下する事が出來る。然るに善知鳥峠を隧道で越ゑるとやがて汽車は山間の稍濶い平地に出て其の中を細い小野川が流れて居るのが見られる。此の處で人々は此平地に對しては小野川が餘りに貧弱であるといふ樣な感じに襲はれるだらう。此の平地が今回紹介されやうとする小野盆地である。小野盆地を過ぎると汽車